

広島県立美術館

研究紀要

第23号

発表概要報告

広島県立美術館蔵中央アジアコレクションの全容

～長い旅の末にたどり着いた染織とジュエリー …………… 福田 浩子 1

広島県立美術館の特別展一覧 1968-2018 …………… 岡地 智子 7

2020

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.23

The Central Asian Collection of the Hiroshima Prefectural Art Museum: 1
Traditional Costume and Jewelry
FUKUDA, Hiroko Siddiqi

List of Special Exhibitions at Hiroshima Prefectural Art Museum from 1968 to 2018 7
OKAJI, Satoko

2020

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN

発表概要報告

広島県立美術館蔵中央アジアコレクションの全容 ～長い旅の末にたどり着いた染織とジュエリー～

福田 浩子

2019年12月16日、翌12月17日からのミルジヨエフ・ウズベキスタン大統領の初来日プレイベントのひとつとして東京の帝国ホテルを会場に「シルクロードにおけるウズベキスタンと日本」国際科学学会が開催された（図1～3）。

同学会は、第一部：開会式・挨拶、第二部：日本の博物館が所蔵する中央アジア文化遺産について出版物とドキュメンタリー映画の紹介、第三部：ウズベキスタン文化遺産研究、保存、宣伝国際協会の新発見と新たな活動方向に就いての研究報告、第四部：研究発表、第五部：「考古学者加藤九祚のウズベキスタンに於ける活動」写真展、第六部：陶芸家ウズベキスタン共和国芸術アカデミー正会員シャラフッディン・ユスポフ氏のマスタークラスで構成されていた。第二部から第四部にかけて、日本とウズベキスタンの専門家や研究者が会して発表が行われ、招待された筆者は第四部で当館の所蔵品と活動についての発表を行った。本稿はその発表要旨に加除して再構成したものである。

さらに、この日に合わせて、ウズベキスタン国内外の文化遺産を集大成した書籍のシリーズの日本篇¹が発表された。



図1 学会会場（帝国ホテル東京）



図2 著者発表



図3 伝統的な書見台を使用した書籍の展示

当館の中央アジアの工芸品収集の経緯

広島県立美術館は、1968年、広島県広島市に開館して以来、たくさんの方々の善意の寄贈と購入によりコレクションを充実させ、数多くの展覧会を通じて、美術の魅力を伝えてきた。公立美術館の使命として地域の美術に目を向けた収集は51年前の開館時から継続されていたが、美術館の建物を建てかえることが決まり、1991年には従前からの「広島県ゆかりの美術作品」に加えて、「日本とアジアの工芸作品」、「1920-30年代の美術作品」の収集方針を策定し、特色あるコレクションの形成を目指すこととなった。

i ХИРОСИМА ПРЕФЕКТУРАЛ САНЪАТ МУЗЕЙИ ТЎПЛАМИДАГИЎЗБЕКИСТОНГА ОИД ЭТНОГРАФИК АШЁЛАР, ETHNOGRAPHIC MATERIAL FROM UZBEKISTAN IN THE COLLECTION OF THE HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM, ЭТНОГРАФИЧЕСКИЙ МАТЕРИАЛ ИЗ УЗБЕКИСТАНА В КОЛЛЕКЦИИ ХИРОСИМСКОГО ПРЕФЕКТУРАЛЬНОГО МУЗЕЯ ИСКУССТВ, Ф.Ф. Абдухолиқов, Э.В. Ртвеладзе, Сергей Лаптев, Киносита Ватару, Ёнэда Юсуке, Сасаки Тацуо, Инагаки Хадзимэ, Такэда Тамако, Иваи Сямпэй, Ёсинобу Тацуми, Сикаку Рюдзи, Фукуда-Сиддики Хироко, «Марказий Оснэ маданий мероси Япония музейларида (日本の博物館が所蔵する中央アジア文化遺産)» китоб-альбоми, «East Star Media» МЧЖ, «Darakchi inform servis» МЧЖ буюртмасига кўра, Тошкент, 2019. - 544р.+DVD

日本の経済がとくに好調だった数年間には、特別収集期間として収集方針に沿った質の高い多数の作品を迎え入れることが叶い、この時期に中央アジアの作品群のほとんどを収集した。現在の建物に建て替え、再出発した1996年以降、所蔵作品展の中で、中央アジアの作品群を幾度にもわたって紹介している。

広島県立美術館のアジアコレクション概要

当館は3つの収集方針のひとつである「日本を含むアジアの工芸」の方針のもと、アジアの工芸作品としてどのような作品を所蔵しているか、概要を紹介する。分野としては、染織と金工の2種類となる。染織では、インドやインドネシア等もあるが、大きな割合を占めているのが、約190点からなる中央アジアの染織である。中央アジアの染織およびトルクメンの装身具というコレクションは、国内でもユニークなものである。染織は計190点、装身具はトルクメン750点である。中央アジアの多様な工芸世界を網羅するものとは言えないものの、充実した核となるグループがある。例えば、ウズベクの刺繍布（スザニ）21点、ウズベクの民族衣装23点、トルクメンの民族衣装27点、そして、旧ソ連領中央アジアからアフガニスタン、パキスタン、ペルシア等の広範囲にわたる各種の刺繍袋コレクション124点を所蔵している。また、8-14世紀のイラン東北部からアフガニスタン、カザフスタンに広がるホラーサーン地方で作られた、イスラム金工の粋を示す金属器8点も有する。次は主要な作品群について述べたい。

刺繍布スザニ

この場の参加者の多くはよくご存知のことではあるが、スザニについて簡単に説明しておく。スザニは、ペルシア語で針という意味のスザンから派生した言葉で、刺繍または刺繍したものの意、様々な素材、様式のスザニを中央アジア全域で見ることができる。スザニは主にウズベク人やタジク人によって制作され、中央アジアの広い地域で壁掛けや掛け布、アーチ型のミヒラブを表したものは礼拝布として用いられる。

作り方は次のようである。縫い合わせていない細幅の木綿布や絹布に下絵を線描し、色の名前を文字で書いたものを、一族の女性たちが分担して刺繍した。最後に、刺繍した数本の布を縫い合わせて完成させる。そのため、時には布の継ぎ目で刺繍糸の色が違ったり、刺繍の刺し方が異なったり、下絵どおりに刺繍していない例も散見される。下絵は、一族あるいはその地区の経験豊富なものが描いた。現代ではボールペンやカーボン紙などで下絵を描き、またはプリントし、やはり色名のイニシャルを書き、それぞれの縫い手に渡される。

刺繍糸はもっぱら絹糸で、ウールも用いられる。甘藷りの太い糸、色数は十数色認められ、天然染料や化学染料で染色されている。古来、とくにブハラは染色技術の一大中心地であり、複雑な経緋の緋糸の染色や金糸刺繍で知られており、19世紀にはブハラには染色職人のギルドがあり、各工程の分業が行われていた。天然染料は、藍（葉）、茜（根）、タマネギ（皮）、ザクロ（果皮）、五倍子、輸入のコチニール（虫）などが、媒染剤にミョウバンを用いるアルミ媒染が主に使われる。19世紀後半には化学染料が天然染料に代わって広く用いられるようになり、現在に至っている。現代では、さまざまな側面で伝統文化が見直され、改めて天然染料を使う工房が増加している印象がある。見学させていただいた複数の工房で、一度に濃淡の二色を染める方法を見、糸と染料、水の比率と分量を厳密に

計量する日本の染め方と対照的に思えた。

刺繍のステッチ（刺し方）は、一枚のスザニに複数の種類が用いられることもあれば、ほぼ一種類のみのこともある。クロス・ステッチ、チェーン・ステッチ、コーチング・ステッチなどが確認できる。チェーン・ステッチはユルマと呼ばれ、普通の針を使う方法とレース針のようなかぎ針を使う方法の、ふた通りの刺し方がある。後者は長方形の枠に布を固定し、表側からかぎ針を刺して、刺繍糸を引き出すのを繰り返してチェーン・ステッチを刺す。ボスマはコーチング・ステッチの一種、生地が見えないほど面を埋めつくすのに使用される。パラック（宇宙）と呼ばれるデザインでは、生地を全面にわたって刺繍のステッチで埋め尽くし、生地は表からはほとんど見えない程である。クロス・ステッチの一種は現地ではイロキと呼ばれ、シャフリサブスで作られたものに特徴的なステッチとされる。宮廷用の豪華なものでは、金糸や銀糸を使った作例もある。現在もブハラを中心に、数多くの工房で金糸刺繍が行われているが、日本製の金糸がウズベキスタンで使われていることはもっと知られてもよいだろう。

刺繍が終わったら、布を縫い合わせて一枚のスザニに仕上げる。裏地や縁取りがつくこともある。絹地のスザニは裏地がつけられることが多く、木綿にも裏地をつけることもある。裏地には無地の木綿布、ロシア更紗と呼ばれる木綿プリント布、チャパンにも使う経緞布（アトラス）などが見られる。勿論、後世になってコレクターやディーラーの手で裏地がつけられることもあるので、オリジナルかどうかの判断には注意が必要である。傷みやすい周囲を補強する縁取りは、バイヤス布が使われる。

ウズベクやタジクの家では、かつては女の子が小さい頃からスザニを準備し始め、婚礼の際に花嫁は数枚～十数枚のスザニを持参した。現代は簡略化が進み、バザール（市場）で買ったり、ミシン刺繍のスザニを注文したりする風潮が広まってきた。一方で、手刺繍によるスザニ制作は商業的に息を吹き返し、女性たちは家族のためでなく内職として刺繍するようになり、とくに欧米向け輸出用スザニの生産が伸びている。グローバル化の中で生活様式や価値観が変化する現代にあっても、伝統文化の再評価、民族の誇りとしてのスザニの存在は大きいといえる。

スザニは用途や文様構成によって異なる名が与えられる場合もある。一辺3メートル以上の大型のスザニはもっぱら壁掛けや覆い布として、ミヒラブを表した祈祷用敷物（ジャイナマズ）やこたつ掛け（サンダルプシュ）、食事の際に食卓として床に敷く食卓布（ダスタルハン）のように用途によるもの、オイ・パラックのように文様構成によって特定の呼称がある。

スザニの文様には見てわかるもの、形は変化していても判明しているものもあれば、抽象化されてもはや本来の姿がわからないものもある。オイ・パラックの場合、大きな円はたとえ複数あっても月（の光）を、小さな円は星（の光）を表していると考えられる。オイ・パラック

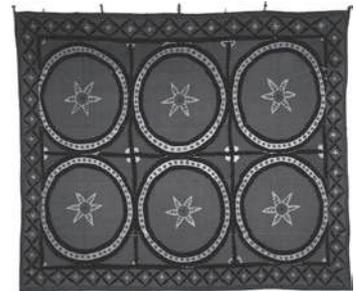


図4 刺繍布（スザニ）



図5 刺繍布（部分・表）



図6 刺繍布（部分・裏）

は月と星のきらめく夜空を抽象化したデザインである(図4~6)。

文様の特徴は大小または同じ大きさの連続する円文で、その数は一つから20個以上までさまざまである。どれも一般的には単にオイ・パラックやパラックと呼ばれている。しかし、六つのアイ(アルトゥ・オイ〔パラック〕)、20のオイ(イグルマ・オイ〔パラック〕)のように円文の数によって呼称されることもある。この呼び方は研究者よりは古美術を取り扱う現地商人の間でよく行われているようだ。プスケント様式は円の中央に六弁または八弁の星状または花状モチーフが配置される。タシケント様式は円文の内側は一色で、内側には同色でもうひとつの円文が置かれている。このように様式に地名を冠しているが、現代ではタシケントでプスケント様式を制作したりしているので、制作地を様式名と同視してよいかどうかは怪しい。アイ・パラックに使用される色彩は限られている。円文内部は、主に赤を基調とした無地、赤以外には円文が赤紫のアイ・パラックもある。いずれにせよ赤系の色調が必須のようだ。

満天の夜空を表しながら、なぜ赤でなければならないかという疑問に対する確かな答えはまだ見いだせない。また、円文を取り巻く深緑、黄、茶、焦茶等のボーダーを見ることができる。オイ・パラックは他のスザニと異なり、刺繍によって生地をほとんど埋め尽くす。しかし、時代が下ると赤い布を使い、輪郭やボーダーだけを刺繍した簡略な例もある。他のデザインのスザニ同様、伝統的な手刺繍だけではなく、二十世紀初頭にはミシン刺繍でも行われている。

ヌラタはウズベキスタンのナヴォイ州に位置し、早くも紀元前3世紀のアレクサンドロス大王時代に記録が現れる古い都市で、この作品のように優雅で華麗な草花文のある様式のスザニが知られる。産業のない村々では、刺繍は自宅でできる手頃な仕事として行われ、様式の名前として冠するようになった場所でも、近年になって販売用農作物に力が入り、刺繍の仕事の方が衰退してしまったところもあると聞いた。スザニの様式は地域によって異なり、タシケント、サマルカンド、ブハラ、シャフリサブスなど都市名を冠して称されてきたが、現代では人気のある様式をまったく別の地域でも制作することがあり、様式によって制作地を推測することは難しくなる傾向にある。

中央部にアーチ型のあるものはイスラム教のお祈り(ナマズ)の時の敷布として使われる(図7)。この地域では、古代からゾロアスター教、マニ教、仏教、景教等が信じられていたが、9世紀にイスラム教が伝わってからはスンニ派が大多数となった。一日に5回、聖地メッカの方角に向かい、アーチ型の文様を表現した絨毯等の敷物の上で祈りを捧げる。

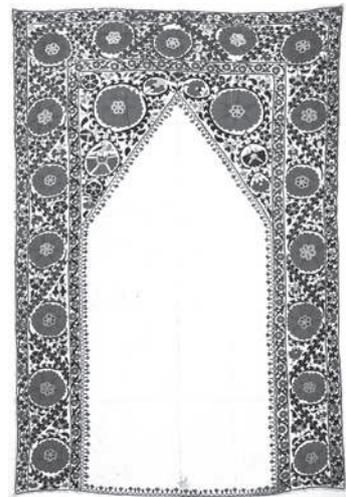


図7 刺繍布(ジャイナマズ)

以上、刺繍に関することは先のエルミラ・ギェル氏の発表と重複する部分があるかもしれない。なお、エルミラさんは当館のアーチ型のスザニをルイジョであると仰り、今回ウズベキスタンで出版された書籍ⁱⁱではルイジョの名称がつけられたが、当館では祈祷布ジャイナマズとして紹介していることを申し添えておきたい。

ii 註iに同じ。

ウズベクの民族衣装

さらに、ウズベクの民族衣装ではチャパン、クイナク、イシトンなどを所蔵している。ウズベク語でチャパン、アラビア語やロシア語でハラトと呼ばれる長袖長丈で前開き打ち合わせのコートは、どれもにぎやかな大柄の文様と鮮やかな色彩で圧倒的な存在感を持っている。

シルクロードの中心に位置するオアシス都市では、絹を中心に染色技術が大いに発展した。特に「七色の」と形容された経緋（ハンアトラス）は、いくつもの工房によって複雑な工程を分業して制作され、次々に創られる新しいデザインが人々の生活を彩った。中央アジアの緋は、経糸になる絹糸を括って染め分けてから織る経緋である。緯糸に絹や木綿などを使い分けることで、異なる質感が織り分けられる。この作品は経糸に絹、緯糸に木綿を使い、裏地にプリントの木綿を当てている。光沢のある表面は玉ねぎのすりおろしを塗って砥打ちすると現地で聞いたことがあるが、一方で卵の白身を塗るともいう。中央アジアの緋は、経糸になる絹糸を括って染め分けてから織る経緋（ハンアトラス）で、緯緋は行われぬ。

ウズベクの女性はズボン（イシュトン）をはき、丈の長いワンピース（クイナック）を着て、経緋で仕立てた外衣（チャパン）を羽織る（図8）。外出の際には、さらに被衣（パランジャ）を頭から被り、顔の前に馬の尻尾の毛を編んで作られるチャチワンを垂らし、顔を隠した。男性は、頭に白いターバンを巻き、大柄を染め分けた色鮮やかなコートを羽織り、腰には帯布（ベルボク）や重厚なベルトを着用し、こだわりの装飾を施したナイフを携えた。



図8 女性用外衣（チャパン）

色鮮やかな大きな文様を大胆に配置したチャパンは老若男女を問わず着用され、中でも裕福な人々はチャパンの上に金銀宝石で飾った豪華なベルトを締めて装った。複雑な技法で織り付けた縁飾り、経緋の見返し、ロシア産の派手なプリント木綿の裏地・・・チラリと見える部分にまでこだわりが感じられ、日本の羽裏の美学にも重なる。宮廷では、袖丈の異なる衣装を何枚も重ね着して、十二単のようなおしゃれを楽しんだ。

イスラム金工とジュエリー

金工では、8-14世紀のイラン東北部からアフガニスタン、カザフスタンに広がるホラーサーン地方で作られた、イスラム金工の粋を示す金属器8点、現在のトルクメニスタン、アフガニスタン、イラン東部あたりで作られ、使われてきたトルクメンのジュエリー750点を所蔵する。日本国内ではポーラ文化研究所、国立民族学博物館などにも所蔵がある一方で、広島のトルクメンジュエリーのコレクションは世界でも有数の数量と質の高さを誇るコレクションである。

中央アジア工芸の展示を通じた活動紹介

当館では、特別展「アジアの染織展」や「トルクメン・ジュエリー～シルクロードの贈りもの～」をはじめ、所蔵作品展での十数回に及ぶ特集展示を通じて中央アジアの工芸作品を展示してきた。館蔵コレクションの一部を初めて展示したのは、1996年の特別展「アジアの染織展」で、5部構成の第5部中央アジアの染織においてであった。作品を受け入れて間もない、調査研究が端緒についたばかり

この時期、今は亡き加藤九祚先生ⁱⁱⁱ、その奥様で服飾研究の加藤定子先生^{iv}のご指導をいただけたのは類まれな幸運であったと心より感謝している。

所蔵作品展では、毎年あるいは2年に1回程度、様々なテーマで中央アジアの文化を紹介することに努めてきた。本日（発表時）も当館展示室には中央アジアの染織作品20点ほどを展示しているが、昨年の夏に小特集「中央アジアの工芸」を開催した際、SNSやワークショップなどを通じて、これまでにない手応えを感じることができた。中央アジア刺繍のワークショップには、東京、千葉や大阪、和歌山、福岡など全国から参加者が駆けつけてくださり大盛況となった（図9）。また、学校や公民館でのパラオ（オシ、プロフ）料理講座も継続して門戸を開いている。



図9 中央アジアの刺繍ワークショップ案内

さて、漫画家の森薫氏が連載されている『乙嫁語り』は、19世紀末期の中央アジアの人々の暮らしと文化を美しく繊細なタッチで表現し、2014年マンガ大賞を受賞した作品である。

また、外務省の「中央アジア+日本」対話10周年を記念したイメージキャラクターも担当し、国際交流への貢献でも活躍している。つい先日（発表時）12巻が発行され、10年に及ぶこの漫画によって日本人の中央アジア感が随分変化したと感じている。2018年には当館ミニガイドのためにオリジナルカラーイラストを描いていただいた（図10、11）。ミニガイドは本日少しお持ちしたので、ご希望の方に進呈する。



図10 森薫「中央アジアの衣服と布ウズベク人」



図11 森薫「中央アジアの衣服と布トルクメン人」

駆け足ではあったが、当館の中央アジアのコレクションと展示を通じた活動をご紹介させていただいた。

これまで研究助成くださったポーラ美術振興財団、三島海雲記念財団、現地または国内でご指導ご協力くださった皆様に心より感謝いたします。

広島は東京から新幹線で約4時間、ウズベキスタンが誇る特急アフラシアブ号（図12）ならタシケント～ブハラくらいの所要時間です、ぜひ一度、当館へもご来館ください。



図12 特急アフラシアブ号

ご静聴ありがとうございました。

（ふくだ ひろこ／当館学芸課長）

iii 同日の学会では第五部として、「考古学者加藤九祚のウズベキスタンに於ける活動」写真展（会場：帝国ホテル東京 西孔雀の間）が行われた。

iv 1996年の特別展「アジアの染織展」では加藤定子氏には中央アジアの民族衣装展示方法について実地のご指導をいただき、加藤九祚氏にはご講演していただいた。